地域情報（県別）

【東京】見た目は草食、中身は肉食？ 都会で活躍する「ロールキャベツ系総診」とは-岡田悟・東京北医療センター総合診療科医長に聞く◆Vol.1

2023年7月14日 (金)配信 m3.com地域版

初診外来を担当して幅広い疾患に対応し、内科入院の約8割を診る――。東京北医療センター（北区）の総合診療科は院内では「メジャー」としてその機能を生かし、新型コロナ対応でも活躍した。都会の急性期病院では珍しいと思われる体制はどんな背景で築かれたのか。「ボトムアップで皆でつくっている点が大きな特徴」と同科の岡田悟医長は話し、キャッチコピーである「ロールキャベツ系総診」の由来に絡めて科の雰囲気や活動を語った。（2023年6月14日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら
▼第3回はこちら

岡田悟氏

――東京北医療センターの院長にあたる宮崎国久管理者を2022年に取材した際、同センターは「総合診療医が充実している」と話していました。

当センターは2004年の開院時から総合診療科を標ぼうしており、院内ではメジャーな診療科に位置づけられています。外来では内科の患者さんをまず総合診療科（総診）が担当し、患者さんに応じて各科に振り分けていますが、およそ9割は総診内で対応が完結している状況です。病棟も受け持ち、ICUとHCUを含めて内科の入院患者さんの約8割を担当しています。

急性期病院でありながら総合診療を強みとしているのは、当センターの成り立ちが関係しています。当センターは地域医療の支援を目的に活動する公益社団法人「地域医療振興協会」が運営しているのですが、同協会は1986年に自治医科大学の卒業生が中心となって立ち上げた団体です。自治医大は地方やへき地の診療所に勤務する医師が多いことから、総合診療医が多い特徴があります。センター開設時もこの大学出身の医師が多かったため、自然と総合診療を強みとし、それを重んじる文化が息づくようになったと聞きます。

――東京北医療センターは新型コロナ対応に流行初期から注力してきたといいます（詳細は『【東京】専門病院ではないのになぜ？ COVID-19流行初期から対応に注力する理由-宮崎国久・東京北医療センター管理者に聞く◆Vol.1』を参照）。宮崎管理者はそうできた理由に「総合診療医の充実」を挙げていました。

「総合診療医がまず診る」という当院の特徴が非常時のコロナ禍でも生きました。私たちにかかる負担は小さくありませんでしたが、新型コロナ対応の仕組みづくりや医師の働き方などから科のメンバーも関わって意見や希望を伝え、ボトムアップで体制が集約されていったのは良かったと思います。

運営母体である地域医療振興協会も当センターの新型コロナ対応を事例に挙げ、「こんな有事に総合診療は重要」とメッセージを発してくれました。

――「ボトムアップ」という発言に関連して、総合診療科のサイトでは「仲間と創る、生き活きとした総診」をテーマに掲げています。

「皆でつくる」点が、当センターの総診を表わすのに最もしっくりくる表現ではないでしょうか。外来診療や病棟運営、人材育成をトップダウンではなく、専攻医を含めてプロジェクト化して進めており、現場のニーズに合わせた方向転換を柔軟にできる利点が新型コロナ対応でも生きたように思います。

初診外来を担当して幅広い疾患を診る、病棟も受け持つ、といった点は機能の特徴としてもちろん重要ですが、私たちはそれらより理念を大切にしているんですね。実際のところ、在籍している専攻医は科の雰囲気や私たちが行っている活動に興味を持ち、「楽しそう」などと感じて来てくれた人が多いようです。

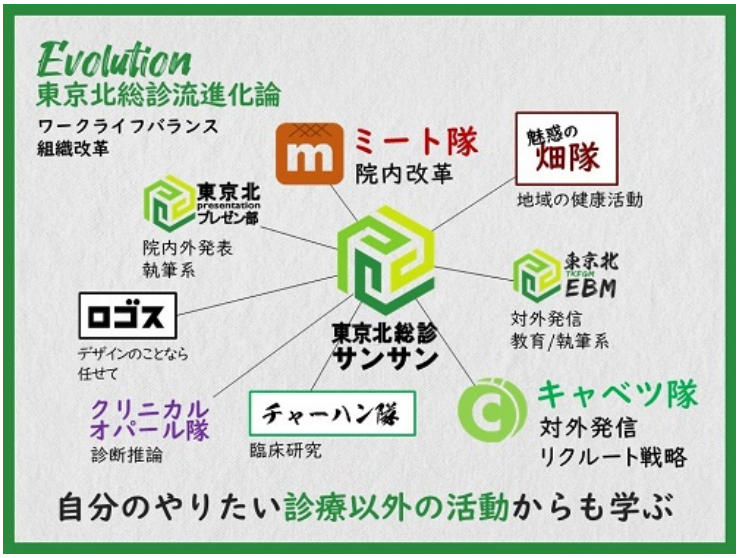
――サイトでは「ロールキャベツ系総診」と銘打っていますね。一見して意味が分かりづらいところが面白く、私のように「どんな意味？」と関心を持つ人がいるかもしれません。

「見た目は草食、中身は肉食」な特徴をロールキャベツに例えました。和気あいあいとした雰囲気でワークライフバランスを大切にしているのは、一見すると「草食系」に見られるかもしれません。しかし、中身の部分、つまり総合診療の面ではEBM（エビデンス・ベースド・メディスン）を重視しつつ集中治療や家庭医療を「肉食系」のようにガツガツとやっています。

これは、ある専攻医がぽつりと漏らした言葉でした。私たちの価値やビジョン、ミッションを定めようとブレスト（ブレインストーミング）を重ねるなか、なんとなく共通項が抽出できてきたタイミングでその医師は言ったんです。「うちらって、なんだかロールキャベツみたいだよね」と。

――「ロールキャベツ」に絡めて、科の活動部門を「キャベツ隊」「ミート隊」「畑隊」「チャーハン隊」などと名付けているのもユニークです。

総診の医師に何かやりたいことがあったとき、その舞台を用意してあげたい思いから複数の「部隊」を設けました。「キャベツ隊」は情報発信やブランディング、リクルート活動を、「ミート隊」は院内改革を、「畑隊」は地域の健康活動を、「チャーハン隊」は臨床研究を行う部隊です。ほかにも、「東京北プレゼン部」や「東京北EBM」、診断推論を行う「クリニカルオパール隊」やデザイン関係を担う「ロゴス」があります。



院内外で活動する総合診療科の各部隊（本人提供）

――私が取材依頼したのは宮崎管理者の発言を背景に、総診のフェイスブックの投稿を見たことがきっかけです。情報発信を担当する部門があるのですね。

キャベツ隊が総診のホームページやSNSの運営、医師向けのウェブ説明会やマーケティングも行っています。ほかの具体例として、院内改革を進めるミート隊は月に1回の頻度でミーティングを行っており、外来システムやオンコー

ル体制、各種勉強会などさまざまな面で課題感を共有し、改善案を話し合っています。先述した、当センター志望の医師が興味を示してくれる「活動」にはこういったものがあります。

◆岡田 悟（おかだ・さとる）氏

2006年宮崎大学医学部卒。東京医科歯科大学で初期研修を受け、東京北医療センターで総合診療専門研修プログラムを受講し修了。2012年から同センター総合診療科指導医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索